

雖欲爲孤豚、豈可得乎。子亟去。無汚我。我寧遊戲汚瀆之中、自快、無爲有國者所羈、終身不仕快吾志焉。莊子というのは、蒙の人である。名は周。かつて蒙で漆園管理うるしはなげの役人であった。梁の恵王や齊の宣王と同じころである。(中略)楚の威王は莊周を賢者と聞き、使者をたて手厚い贈り物を与えて迎え、宰相にするのと約束した。莊周は楚の使者に向かい、笑いながら言った。「千金の利益は重く、卿・相は尊い位だが、おぬしは郊の祭に生贄にされる牛を見たことはないか。何年も飼育して、繡の着物をきせて、大廟へ引きこむ。その時になって小さな豚になりたいと思っても、それができようか。おぬしはすみやかに去れ。わしをけがしてくれるな。わしはきたない溝の中でゆるゆると泳ぎまわるのが愉快なのだ。国をもつ者にしはられることなく、一生仕えず、わしの心のままにしているまでだ。」(原本は『史記會注考證』本に拠り、解釈は、岩波文庫本に拠った。) (傍線筆者)

この「官舎幽趣」の出典を考察するにあたり、とりわけ留意したいのは中国古典籍からの「重層的」な投影が窺える点である。この句の場合も、道真がこの莊子の話を踏まえた出典として想定すべきものは、前述の『史記』ではなく、別の古典籍『文選』に載る郭景純の「遊仙詩七首一一」の次の作品だと考える。

遊仙詩七首一一

郭景純

京華遊俠窟

みやこは遊侠の士の多くあつまる所であり

山林隱遯棲

山林は隱遁者の棲むところである。